

## 『終の棲家へ』 クリスティナ・ロセッティ作

— 解説と翻訳 —

“From House to Home” by Christina Rossetti: A Translation

滝 口 智 子

Takiguchi, Tomoko

## ABSTRACT

“From House to Home” is a dramatic monologue included in *Goblin Market and Other Poems* (1862), the first collection of poems by Christina Rossetti (1830–94). This is a good example of Rossetti’s poetry testifying to her unique religious historicity.

To today’s reader, the poem seems full of mysteries. These mysteries derive mainly from a historical peculiarity: the poem reflects certain ideas about Christian eschatology that were prevalent during the mid-Victorian period Rossetti lived in. By exploring these religious ideas in context and examining how Rossetti incorporates them, we can start to unravel the mysteries of the poem. I take this perspective in an upcoming article (provisionally titled “Blessed Women—Christina Rossetti and Christian Eschatology”). Here I offer a Japanese translation to complement that article.

## (解説)

『終の棲家へ』（“From House to Home”）はクリスティナ・ロセッティ（Christina Rossetti, 1830–94）の第一詩集『小鬼の市その他の詩』（*Goblin Market and Other Poems*, 1862）所収の詩作品である。その形式はいわゆる「劇的独白」と呼ばれるもので、詩の語り手が自分の聴き手に向けて長い独白を行っている。独白の内容は語り手の心の宗教的体験であり、それは彼女が見たふた

つの「夢」あるいは「幻」として語られる。このため、語り手を宗教的な啓示を受けた一種の神秘家と捉えることもできる。

ふたつの夢のうちひとつは、語り手の心にある地上の楽園の夢であり、もうひとつは、(その夢の中で) 地上の楽園を失った語り手が失意のうちに見た天国の夢である。この作品はこのように、語り手が夢のなかでもうひとつの夢を見る、という複雑な入れ子構造になっている。なお、タイトルの“House”は人間が建てたかりそめの宿であり、やがては崩落してしまう地上の楽園を指し、“Home”は苦しみ多き地上の生活に疲れた人間にとっての最終休息地、終の棲家である天国を指している。

ヴィクトリア朝詩の研究者であるジェローム・マッギャン (Jerome McGann) は、『終の棲家へ』を解釈することは「詩の迷路に迷い込むことだ」と述べて、その解釈の難しさを指摘している。ロセッティは英国国教会高教会派の敬虔な信徒であり、ヴィクトリア朝のイギリスで当時失われつつあったひとつの伝統的なキリスト教の流れに与していた。『終の棲家へ』は、究極的にはそうした彼女の信仰であるキリスト教の神秘を描いているため、現代の私たち (の多く) にとってかなり異質のものと感じられてしまう、というのがマッギャンによるこの詩の難しさの説明である。<sup>(1)</sup>

しかしマッギャンも示唆しているように、このような「異質性」こそがロセッティの詩の大きな魅力のひとつであるのかもしれない。というのは、その異質性を検証することによって、彼女の属していたある種のキリスト教文化圏の考え方や世界観が浮かび上がり、また彼女がどのようにそれらを織り込みながら詩を創作していたかが理解されるからだ。ここにロセッティの詩の「歴史性」——詩人の生きた時代において、詩と文化がかかわりあう様子——を見ることができると言えるだろう。

そのような歴史性のひとつとして挙げられるのが、ロセッティの詩における

---

(1) Jerome J. McGann, “Introduction”, in *The Achievement of Christina Rossetti*, ed. David A. Kent (Ithaca and London, Cornell UP, 1987), 11–12.

キリスト教終末論の考え方である。『終の棲家へ』には、キリスト教のふたつの終末論が共存している。ひとつは「歴史的終末論」と呼ばれるもので、キリストが世の終わりに再臨し、全人類が死から復活し、最後の審判が行われ、永遠の命が与えられるという考え方である。もうひとつは「個人的終末論」と呼ばれるもので、ひとりひとりの人生において魂が進歩をとげ、永遠の命を獲得してゆくという考え方である。至福に到達できるのは世の終わりだとする歴史的終末論は、地上の生をかりそめのもので捉えるため、地上的な喜びへの軽視を伴いやすい。一方個人的終末論は、地上における個人の人生を重視するため、地上的な喜びを積極的に評価することがより可能となる。『終の棲家へ』の特異な点は、これらふたつの終末論を共存させていることである。それゆえ、作品中で地上への否定的な態度と肯定的な態度のせめぎあいが起こる結果となっている。

ヴィクトリア朝中期は、大きな流れで見れば、キリスト教終末論が歴史的終末論から個人的終末論へと転換してゆく最終段階にあった。つまり、(個人の人生において魂が高みに達すると考える点で)空間的な発想をもつ個人的終末論が、(人類が歴史上のある一点に向かっていると考える点で)強い時間意識をもつ歴史的終末論に対して、勝利を収めつつあったのである。<sup>(2)</sup>『終の棲家へ』にも、ふたつの終末論が描かれるなかで、高みを目指す「空間の終末論」が、「時間の終末論」に対してしだいに優勢になってゆく様子が力強く描かれている。これにより、地上の生への否定というよりも、地上の生への肯定が高らかにうたわれていると捉えることが可能となっている。

翻訳の原詩として *The Complete Poems of Christina Rossetti, A Variorum Edition*, ed. R. W. Crump, 3 vols. (London: Louisiana State UP, 1986-1990), I: 82-88 を使用した。『終の棲家へ』におけるキリスト教終末論について、より詳しくは拙著「祝福された女性たち——クリスティナ・ロセッティとキリスト教終末論」『長尾輝彦先生退官記念論集』(仮題, 近刊) 所収を参照されたい。

(2) Rosemary Radford Ruether, *Sexism and God-Talk: Toward a Feminist Theology* (Beacon Press, 1993), 317-19, 328-36.

(訳詩)

『終の棲家へ』

ひとつめの幻は 真夏の日にみた夢のようで  
ふたつめの幻は 無感覚のうちにみた夢のようだった。  
冬の月明かりの下 凍えかけた心臓が  
ゆるやかに鼓動をうっていたわ。

「でも それはいったい何なの？ どこにあったの？」  
と私のお友達が訊ねる。  
—— それは喜びの里 私の心の中にあるもの。  
私を誘う 美しすぎる地上の楽園。

その楽園は幻 嘘でつくりあげた建物  
やがては崩壊し 後に残るのは痛ましい廃虚だけ。  
美しい幻を空高くかかげてみたところで なんの意味もないわ  
粉々に碎かれてしまうだけなのだから。

雷文様のきらきら輝く尖塔が  
いくつもそびえ立つ私の城は  
乳白色のガラスの上に建てられていた。  
夏の夕暮れ時には炎のように燃え上がったの。

なだらかな草原に大きな樹々が  
けだるい陰を落とす私の喜びの里には  
そこかしこに柔らかな花壇がちらちらと見えていた  
炎のように 空や雪のように。

草の上でのんびり遊ぶリスたち、  
    恐れを知らずに跳ね回る子羊。  
樹上には 喜びいっぱいにさえずる小鳥たちが  
    不安もなく命を謳歌していた。

モリバトは連れあいを探し ヒメモリバトは巣作りをし  
    歌や花や果実で満ちた私の樹々は  
枝をいっぱい伸ばして動物たちの町を作っていた。その根元に  
    暮らすのは小さな野ネズミたち。

遠くまで広がるヒースの茂み。その陰で  
    きらりと光ってさっと姿を隠すトカゲたち。  
どこに住むとも知れないけれど  
    稲妻のように現れる。

びよんと飛んだりとぼとぼ歩いたり 平和に子孫を増やす  
    おかしな仲間たちはアオガエルやヒキガエル。  
葦の葉がふんわりと頭を揺らして  
    朝露を振りまいている。

私のもとで安心して育ってゆくさまざまな青虫たち、  
    見えない隅っこに暮らすのはナメクジやカタツムリ。  
一晩で大きくなる不思議なキノコも  
    傷つけられることはない。

穴の回廊で一年中  
    せっせと掘りつづけるモグラたち。

臆病なハリネズミが針を逆立てることもない

脅かされたりしないから。

そして私のそばに寄り添ってくれたのは天使のようなひと。

炎のように熱く

底しれぬ海のように深い瞳で

私の願いをかなえてくれたひと。

彼は 時に白いアリッサムのように美しく

時に夕暮れのように赤あかと燃え

時に空を切る翼を背にして

頭に光輪をいただいていた。

ふたりでともに歩みながら私たちは歌をうたった

喜びを何度もなんども呼びおこしながら。

こうして仲むつまじく日がな一日過ごした

夜には夢の中でも親しく過ごした。

それなのにもう私には語れない あのなつかしい小路のことを。

閉ざされて二度と入れないあの小路。

ふたりで話したことも 彼が教えてくれたことも

もう私には語れない。

私に言えるのはこれだけ——だんだんと

気持ちが高まって喜びでいっぱいになったこと。

私たちの摘む花に棘はなかったし

私のお友達が寂しそうだなんて露ほども思わなかったこと...

ある日私が「また明日ね」とささやいて微笑むと  
彼は「今晚だ」と重々しくこたえて黙ってしまった。  
幾マイルもの長い長い道に  
立てられた道標を指さしながら。

「そんなことはないわ 明日は楽しいはずよ。  
今晚よりも明日の方がもっとずっと。」  
すると彼は踵を返して  
顔をそむけてしまったの。

そして何マイルもの道を走り去り どこかへ行ってしまった。  
たった一度だけ振りかえり 手招きをして  
「追放された恋人よ 帰っておいで  
はるかな故郷へ帰っておいで」と言い残して。

その夜 雪崩に遭ったように粉々に打ち砕かれた私。  
たった一夜で私の夏は雪景色に変わってしまった。  
翌朝見わたせば 私の樹の枝には一羽の小鳥も姿を見せず  
子羊もどこにもいなくなった。

太陽も青い空も天から消え去った。  
夜露もなく ただ冷たい霜がおりているだけ。  
いとしいひとよ そのとき私にはわかったの あなたにはもう二度と  
会えないということが。

「もう二度と。」私は呆然としてつぶやいた。  
涙もこぼれなかった。手をもみしだくこともなかった。

そのとき聞こえてきたのは「また会えるよ  
いつかきつと遠いところで」とささやく低い声。

それから私は飢えに苦しむ者のように叫び 起き上がった。  
ろうそくを灯し 部屋から部屋へと捜しまわった  
上へ下へと。凍てつく風がごおと吹き寄せて  
空ろな暗闇を吹きすぎた。

昼も夜もひたすら捜し続けたわ。  
それなのに昼も夜もなんの変化もなかった。  
「もう会えないの もう二度と」と私はむせび泣き  
ろうそくを灯して 祈りもせず歯軋りした。

打ちのめされて打ちひしがれて  
凍りついた床に転がりのたうち回り嘆いた。  
「もうたくさん。胸の鼓動など止まるがいい。  
死んでしまいたい もう死んでしまいたい。」

そうして私の意識は遠のいていった。すると上のほうから  
天空の精霊たちがうたう喜びの歌が聞こえてきたの。  
ひとりが告げた、「あれは私たちの妹だわ 彼女は長いこと苦しんだ」  
もうひとりが答えた、「そうよ だから見せてあげましょう」――

ひとりが叫んだ、「彼女は幸せだわ もう苦しまなくてもいいし  
絶望することもないのだから」  
もうひとりが答えた、「いいえ 彼女はもう一度生きなければ――  
さあ励まして 生かしてあげましょう」



私がじっと横たわっていると カーテンが  
目の前で急にさっと開いたような気がした。  
輝かしい光が差しこむとそこにあるものが  
はっきりと見えたの。

そこには女性がいた。夜と朝とが  
争うところに ひどく蒼ざめた  
美しくてそしてたとえようもなく  
寂しそうな女性が。

その瞳は炎をとり囲む宝石のよう  
星のように威厳があってそれでいて優しい。  
その姿は揺れてうつむくしなやかな茎のようで  
私をとりこにした。

私は草いっぼん生えない外側の地面に立ち  
彼女は花の咲く内側の地面に立っていた。  
そして休むことなく繰り返しくりかえし  
輪を描いて踊っていた。

花たちは棘の上に咲いていた。  
棘は砂地からすくと生えて  
彼女の足を突き刺していた。嘲りの笑い声が響きわたり  
残酷にも手をたたいて喜んでいる者までいたわ。

でも彼女はくじけない。泣きながら血を流していても  
屈することはない 喜びの朝が明けるまで。

無限の哀しみを——その長さを 広さを  
深さを 高さを どこまでも探ってゆくだけ。

そのとき私は気づいた 一本の鎖が彼女の体を支えていることに。

誰が作ったものでもない命の鎖が。

稲妻も風も嵐も越えてまっすぐに伸び

しっかりと天につながっている鎖が。

ひとりが叫んだ、「いったいどれほど苦しめばいいの？地上の岩に繋ぎとめられたまま

耐え忍んだ苦しみは いつか報われるの？」——

もうひとりが答えた、「信仰が嵐にもまれて揺さぶられている 彼女の魂に

もう一度力を与えてあげなければ」

そのとき私には見えたの 嫌な苦い飲み物が

なみなみと注がれた杯が 彼女のもとに

下りてくるのが。鉛色の唇をあけて彼女は飲むけれど

飲み物は少なくならない。

彼女が飲んでいるときちらりと私の目に

映ったのは 新たなぶどう酒と

蜂蜜を削るひとつの手。はじめは苦かった飲み物が

やがてとても甘くなっていった。

彼女の唇も頬も しだいに若々しいばら色に染まっていった。

飲みながら彼女は歌う、「私の心にはもう足りないものは何も無い」

そしてさらに飲み続けた。その間ずっと優しく

ゆっくりと歌が流れていた。

ひとりが叫んだ、「傷こそは真の友

荒野も薔薇のように花開くことでしょう」——

もうひとりが答えた、「ヴェールを上げて もう終わりだと告げましょう

彼女に力を与えて旅立たせることにしましょう」

すると地上も天上もいっせいに巻きあがり

時も空間も変化も死も 遠くへ飛び去ってしまった。

重さも数も計りも 限界にまで突き進んだ。

とうとうこの日がやってきた。

幾千もの魂が喜びに立ちあがった。

輝かしく美しい天使たちと同等になって。

豎琴を手にし 花嫁衣裳を着てくちづけしあい

そして頭には光輪をいただいて。

みなで歌をうたった 高みに立って新しい歌を。

力強い真実の人に向けて 豎琴をかき鳴らしながら。

新しいぶどう酒を飲み 新しい光を放つ瞳で見つめた。

そう すべてが新しく生まれ変わったの。

階段をどこまでもどこまでも上り続けた

恐ろしいほどに高く上った 炎のごとく。

誰にもその数はわからない どんな言葉をもってしても

その秘密の聖なる名前は語れない。

ひとつの鼓動がすべてを揺り動かすように ひとつの血流が

すべてに行きわたるように ひとつの吐息が幾千の声となって

広がるように 彼らは豎琴を奏で 冠を下ろし  
立ちあがり 崇拜し 喜びにうち震えた。

輝きを取りもどした月のように  
ひとつひとつの顔が ただひとつの方向をめざし  
愛の太陽に向いていた。無限に愛を飲み  
愛に浸かり 愛を映し出していた。

祝福された人びとは互いの栄光に輝いて  
もう離れないというように手をしっかりつなぎあった。  
彼らは死者から生まれた者たち  
偉大なる誕生日を迎えた人びと。

心が心にこたえ 魂が魂にこたえ  
たがいに一對を成し 満たし満たされた。  
誰もが愛し愛されていた。なかでも一番愛し  
愛されていたのはキリスト。

その中に私は見たの 愛を失って苦しんでいたあの女性を  
棘の上を歩き 苦い杯を飲んでいた彼女の姿を  
夜に失われ 朝に見出されたそのひとを。  
引きあげられたのかわ 墮ちた女性が。

みなが輝かしい昼の光の中一緒に立ちあがり  
日が一と日ともうたい続けた。  
ひとつひとつの顔は月のように太陽の方を向き  
愛に満たされ 照らされていた。

だからお友達よ 私は考えたりしない

嘘で塗り固めた家を建てようだなんて——ほんの  
かりそめの喜びしか得られないのなら。たとえ打ちのめされていて  
私の魂は完全に破壊されてはいない だから歩みつづけよう。

だからじっと耐え忍び 魂をしっかり保っていこう

そう 火打石のようにきっぱりと顔を上げて  
すべてを壊してもまたすべてを創りあげよう。  
——そう はるかかなたに 遠いところに。

この棘は鋭いけれどその上を歩いていこう。

この杯は苦いけれど「彼」は甘くしてくれる。  
私はいっしんに聖なる都へと顔を向けていこう、  
心にはいつもそこへの想いがあるから。

手も足も弱々しくなったけれど 再び

立ちあがろう 私は7回も醸造した金よりも  
尊いだから。やがて彼が 宝庫から新しいもの  
古いものをすべて持ってきてくれる。

灰には美を 哀しみには喜びの油を

重い心には賛美の衣類を与えよう。  
たとえ今日は木の葉のように枯れてゆき  
病みつかれ萎んでしまうとしても。

たとえ今日は枝を刈り取られたとしても

彼の血が私の根を養い暖めてくれる。

明日にはまた蓄をつけ

果実を実らせることができるだろう。

たとえ今日は長い道を歩かなければならなくても

彼の杖が鞭に代わってしまっても

来るべき日々を待ち続けよう 彼のために。

そう 歩んでゆこう わたしの神とともに。